令和7年度根本正顕彰会総会報告

（会員数 55名　出席者 28名　講演会参加者 34名）

日　時　令和7年5月11日（日）　午後1時30分から

場　所　那珂市中央公民館　2階　講座室

■挨拶

＜山田正巳会長＞

本日は「母の日」であるが、われわれは、父母からは多大なご恩を受けてきたことを忘れない。歴史上、その時代時代で必要とされる人物が出てきたが、現在は優れた傑出した人物を必要としない時代かもしれない。しかし、変難はいつ到来するか計り知れない。根本正顕彰会は、根本正という、世界に誇れる人物を顕彰し続けて、次代に継承し、後継者たらんとする若者の出現に期待したい。

■ご来賓

＜先崎市長＞
＜小泉県議＞
＜大縄教育長＞

■会活動について

今年は、役員改選の年であり、以下の役員が承認された。任期は令和7年度～令和9年度である。

会　長	山田　正巳	副会長	横地　富子
副会長	根本　正治	理　事	仲田　昭一（事務局長）
理　事	小堀　　優	理　事	高畑　精一
理　事	秋葉　　泉（新任）		
監　事	鈴木　正矩	監　事	海野　宏幸

■主な事業

●顕彰フェスティバル（令和7年8月27日）
　芳野地区まちづくり委員会のご理解を得て共催事業。那珂市の名誉市民の顕彰の意味でも、毎年継続していく必要があろう。
●根本正ゆかりの地を訪ねる旅（令和7年9月28日）
　根本正先生ゆかりの地と水戸八景の一部をめぐる。東海村、ひたちなか市湊、大洗町、水戸市の範囲である。昨年は小学生の参加をみたが、本年も家族ぐるみの参加を期待している。
●中央公民館2F ホール展示（令和7年12月2日～令和8年1月31日）
●公開講座（令和8年2月15日）
　講師：横地富子副会長　テーマ：帝国議会議事録に見る根本正の活躍

■公開講演会

講　師　　大子町歴史資料調査研究員　大金祐介氏
演　題　　『水郡線誘致運動と根本正』

＜要約＞
　内容が精選されていて、分かりやすい講演であった。講師が若いだけに、今後の根本正顕彰の継続に期待できる。主な説明項目は下記の通り。
1. 水郡線誘致運動のおこり
2. 水郡線誘致運動の展開
3. 水郡線誘致運動の挫折
4. 水郡線誘致運動の結実
5. 水郡線の全線開通

令和7年度根本正顕彰フェスティバル

日　時　　令和7年8月27日（水）10：00～11：30
会　場　　那珂市ふれあいセンターよしの

■あいさつ

(1)　里口邦夫芳野地区まちづくり委員長

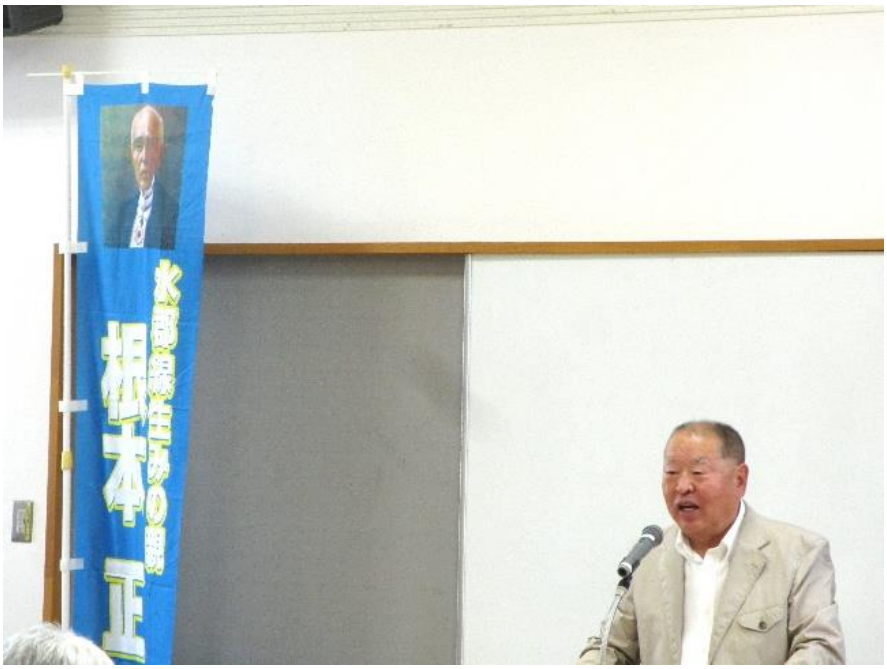
今年度の歴史教室の一つが、那珂市の名誉市民の一人である根本正さんの顕彰会と共催の形でフェスティバル開催が実現したことにより、より深く人物像に迫ることができることをうれしく思う。根本正さんの生き方についてより理解を深め、地域づくりにも大いに役立っていくことを期待したい。また、郷土にゆかりのある画家寺門彦壽および若い青年教師青山信一郎先生の教師像を学んで、今日の教育を考える一助としたい。ご参加の皆様の、日頃のまちづくり委員会へのご協力、ご支援に感謝したい。

(2)　山田正巳会長

那珂市内の各地区をはじめ、根本正ゆかりの関係市町村で開催して来ている「根本正顕彰フェスティバル」、今年度は、芳野地区まちづくり員会の歴史講座の一つを共催としていただくご配慮に感謝申し上げたい。本顕彰会は設立以来20余年の活動を続けている。何事にも挑戦的に臨み、諦めない不屈の精神で生涯を通した根本正先生の精神を継承して、より良い社会の実現に努めてまいりたいと念願している。開催にご尽力いただいた委員会の里口邦夫委員長さまはじめ、役員の皆様方に感謝、お礼を申しあげたい。

■講　話

(1)『不屈の政治家 根本正の生涯』(山田正巳根本正顕彰会会長)



①生い立ち

水戸へ出る。庄屋の次男であり、生家に縛られない。幼少期から勉学への意欲があった。それを助ける人的環境に恵まれていた。姻戚関係に、水戸藩の儒学者で彰考館総裁の豊田天功とその子の小太郎に師事できたことが大きい。庄屋同士の情報交換が盛んであったことを知ることが出来る。

②東京へ出発

明治維新により、水戸藩政が終焉したことで東京へ出ることを決意。視野が広まり、新たな出会いが誕生した。中村正直ら海外を見てきた人物に師事し、親交が始まった。それは、米国留学へと発展した。キリスト教と儒教の道徳が、根本正の生涯を貫くことになる。

③アメリカ留学

米国留学から、キリスト教精神に基づく『平等社会』の実現のためにと、政治家を志す覚悟が固まった。政治家として何をするかが問題であるが、確かな政策を自覚した。『教育立国』を目指すことであり、教育の機会均等と青少年の健全育成である。その実現の背景には、『辛抱強く、諦めない』との胆力が育っていた。『未成年者喫煙・飲酒禁止法』は、『根本法』とも称された。政治家として、名誉この上ない。

④政治家を目指す

当時の選挙権問題に対応する苦労あり。パリ万博の土産であるマッチと時計、これへの新鮮な『感動』が出発点。政治家への志、目標へ向かうひたむきな『努力』『実践力』。 政治家に求められるものは、国家全体の在り方と地域への貢献との『広い視野』を持った『発想力』『創造力』。人は、常に多くの人々に支えられているとの自覚と『感謝の念』を忘れてはならない。

⑤国政での活躍

米国の大統領、ガーフィールドやリンカーンは貧者層からの出発、教育の機会均等策がそれを実現させた。この『機会の平等』を日本でも実現させたい。

⑥地元への還元

高層気象観測所、東海村松海岸への砂防林造営、水郡線敷設への尽力。現在那珂市内には、この水郡線の駅が9つある。この特色を生かしたまちづくりは考えられないか。

(2) 故郷の若き有能者（仲田昭一顕彰会事務局長）

講演する仲田事務局長

①夭折の画家寺門彦壽

大正7年、当時の静村下大賀に誕生。幼少より感受性高く、絵心も豊富で高かった。昭和10年、水戸中学時代茨城美術展覧会へ出品した作品は、審査員であった横山大観から天才少年の折り紙をつけられるほどであった。昭和16年、東京美術学校卒業に際しては、全科卒業生を代表して答辞を読んでいる。

この年、一人大和地方を旅した後、盲腸炎を発症、手遅れの状態であった（24歳）。芸術家の国家社会に対する責務を叫び、再生を渇望し続けた熱情は後世の人をして感動せしめてやまない。

遺作はご子孫によって那珂市へ寄贈され、歴史民俗資料館に保存され、令和6年度には「色彩の貴公子寺門彦壽展」が開催された。

② 青年教師青山信一郎（22歳）

昭和5年芳野村飯田に誕生。水戸中学、東京高等師範学校に学び、動物学を研究。「失敗はおそるるに足らず。事を始めるべき好機である」「どんな高遠な、清純な思想に基づいても暴力、戦争はしてはならない」の信念をもって塩釜女子高等学校の教壇に立ち、懇切丁寧な話術と板書の妙を以て生徒を導いた。生物クラブの松島湾寒風沢での実習観察中、生徒二人が深みにはまり、残る一人を救おうと飛び込むも浮上せず殉職。これを悼んだ宮城県宮城音五郎知事の題額「頌徳」、大場三郎同校校長撰文の頌徳碑が殉職地に建てられた。遺稿集『潮音』が刊行されている。

志半ばで倒れた若き勇者がこの地に生を得ておられたことを誇りとしたい。

令和7年度『根本正ゆかりの地を訪ねる旅』

期　日　　9月28日（日）
参加者　　19名　　トキワトラベル交通バス
ルート　　那珂市中央公民館（8時30分出発）―村松の晴嵐―ナキビチ山―水門の帰帆―華蔵院常陸山建立の海難事故供養碑―昼食（大洗海岸）―巌船の夕照―青柳の夜雨―中央公民館

　根本正ゆかりの地と水戸藩主斉昭公が家臣の心身の鍛錬を含めて選定した『水戸八景』とを組み合わせて、水戸学を学んだ根本正先生の心根を訪ねる旅でした。
　『村松の晴嵐』の碑が建つ海岸の砂防林、海辺の村が全滅するほどの海風の害を防がねばとの強い決意の表れです。
　華蔵院境内の横綱常陸山建立『海難事故遭難者供養碑』、これは高層気象観測所創設の建議の原点でした。横綱の品格とは何かを考えさせられました。
　『青柳の夜雨』碑の背後には、鹿島香取神社があります。ここは、根本正が少年時代に神官の小川伊織や佐川伊予之助に学んだところです。少年時代は、『人間の生き方』をしっかりと学ぶべきです。
　今回巡った箇所すべてに、根本正の『学びへの姿勢』『国民への慈愛』『将来への備え』の姿勢が溢れ出ており、それを体感することが出来ました。一人ひとりが『根本正先生の心』を活かした過ごし方を為していきたいものです。

『村松の晴嵐』

　東海村のボランティアの方が、碑の周囲の草取りをしていたことに驚きました。快く案内もしていただきました。この後、松枯れが進む砂防林の現状を確認しました。

「ナキビチ山」

　海難事故の遺族の救済事業として、砂防林造成を兼ねて松苗を植樹。悲しみをこらえるも、泣きながら、涙を流しながらの植樹作業と云われています。左の白い建屋の後方一帯の山です。

「水門の帰帆」

　太平洋を一望できる和田岬の先端。かつては海防陣屋も置かれ、緊張感漂う所でもありました。ここから海運や漁を終えて帰帆する帆掛け船と海の青さのコントラストは絶景であったかと思います。湊の賑わいを彷彿とさせてくれる名所です。

華蔵院墓地内「白土松吉翁の墓」

　那珂市名誉市民となったサツマイモの神様白土松吉翁の墓に合掌。
　食糧難を救わねばとの一心から栽培の改良に努めた翁。その延長上に今日隆盛の干し芋生産があります。

華蔵院境内「横綱常陸山建立の海難事故遭難者供養碑」

遺族救済のため相撲界を挙げて勧進相撲を興行。益金は遺家族と供養のために。郷里を思う横綱の真心に感歎です。この事故対策には高層気象観測所の創設をと訴えた代議士根本正の決意を想起させます。

「巌船の夕照」

那珂川と涸沼川の合流地点、ここは川の流れの優しさと合流の美しさ、対岸の湊の賑わい、そして西の彼方遥かに筑波山の峰々を遠望。自然美が集中した名所です。　この周辺で、幕末に天狗諸生の騒乱が展開されたことなどを忘れさせてくれるほどの絶景です。

「青柳の夜雨」

那珂川に夜船を浮かべて観る柳か！柳の並木から川面に浮かぶ灯を眺めるか！

碑をよけての築堤に、関係者の歴史愛を感じます。